

# 5750分展Ⅱ

2010年8月7日～10日 「5750分展Ⅱ」公開制作+美術教育座談会 KAPL  
8月29日 「5750分展Ⅱ」シンポジウム+ワークショップ 埼玉県立近代美術館 講堂

## 5750分展Ⅱ —美術教育は生きているか?—

〈5750分展Ⅱ〉は美術教師だけでなく、職業や年齢も関係なく、美術教育について「みんなで考えようよ!」というアクションです。なぜ、みんなで考える必要があるのでしょうか? 現在、美術教育が抱える閉塞感や閉鎖的な風潮と同様に、美術が特定の人だけのものとなっている状況があるからです。美術教育を切り口として、みんなでさまざまな視点から意見を出し合うことで「何か突破口が見えてくるのではないか」と考えたのです。

### はじめに「5750分」とは?



「5750分」、これは何の数字でしょうか? 実は、現在の中学校3年間で学ぶ「美術」の時間なのです。日数にすると約4日間。皆さんはこの数字を多いと感じるでしょうか、少ないと感じるでしょうか? 各教科の授業時間は文部科学省の『学習指導要領』で定められています。『学習指導要領』とは、学校現場でおこなわれる教育活動の指針で、平成24年度から実施される新たな『学習指導要領』では、中学校3年間の「美術」の時間は週に1時限(1年生は1.3時限)とされています。1時限は50分、3年間で115時数なので、合計すると「5750分」が「美術」の時間ということになります(参考までに「英語」は21000分)

### 〈5750分展Ⅱ〉の内容

昨年度を受けて第2回目の開催となる〈5750分展Ⅱ—美術教育は生きているか?〉では、KAPL(コシガヤアートポイントラボ)において「作品公開制作」、「美術教育座談

会」、「街頭インタビュー」の三つの視点から美術教育を考え、また埼玉県立近代美術館ではシンポジウム「『美術教育』で話す!」とワークショップ「『美術教育』で遊ぶ!」をおこないました。企画には主に、鈴木真里子、山口愛、大澤加寿彦、浅見俊哉があたりました。

#### (1) 作品公開制作

8月7日から10日までのKAPLでの4日間には、現役美術教師、アーティスト、現役大学生が美術教育の時間を体で感じながら「公開作品制作」に挑みました。

#### (2) 美術教育座談会とシンポジウム

KAPLで、美術教育について自由に語り合える場を「美術教育座談会」として、4日間の毎日約2時間を設定しました。参加者は毎日約20名で、中学校の美術教師はもちろん、高校の美術教師、大学教員、アーティスト、美術館職員、学生、NPO関係者、地域の方、現役の小学生や中学生とその保護者などが集まりました。現在、学校でおこなっている美術の授業紹介、生徒の作品鑑賞会などから、それぞれ感じている美術観や美術教育観を発表し合い、それぞれの立場から美術教育の価値・意義・役割・問題点や可能性などを発言し合う場になりました。



8月29日、埼玉県立近代美術館の「シンポジウム」では35名の参加者とともに、「理想の美術の授業ってどんなのだろう?」、「わくわくするときはどんなときか?」、「アイデアの出し方」について小グループに分かれてディスカッションをおこないました。

フィナーレには、普段美術に関わることの少ない方、自分には関係がないと思っている方にもう一度考える機会をもってもらえるように「みんなで歌をつくって歌おう!」というミュージシャン大澤加寿彦の着想から、会場にいる参加者から出た意見やKAPLでおこなわれた座談会、街頭インタビューで得られた言葉までが盛り込まれた曲を制作し、皆で歌いあって〈5750分展Ⅱ〉は幕を閉じました。

### 街頭インタビュー

越谷市の街頭でおこなった美術教育についてのインタビューでは、道行く人約100名に次のような質問をしました。「Q1: 美術は好きですか?」(はい: いいえ=79: 14)、「Q2: 美術教育は必要だと思いますか?」(はい: いいえ=72: 8)。また、「Q3: 美術教育についての感想や意見をお聞かせください」との問いには、「美術はおもしろくやるものだから好き(10歳・男性)」、「将来、役に立たないからいらない(14歳・男性)」、「美術以外の教科は先生の指示通りやる



だけだったが、美術は自分で思い通りにできた唯一の時間だった(20歳・女性)」、「お互いを認め合うことが美術ではできないのではないか(25歳・女性)」、「あまり美術の時間のことは覚えていないが今、絵を描いている(65歳・男性)」といった言葉を聞くことができました。

### 〈5750分展Ⅱ〉を終えて

〈5750分展Ⅱ〉の目的は、美術教育に関わる特定の人たちだけではなく、広く、さまざまな方々の意見から新たなアイデアを生み出したいというものでした。そのアイデアはやがて、美術教育の閉塞感や閉鎖的な風潮を突破できるものだと思っています。美術教育の問題を美術教育に携わる人間だけで考えてしまっている、それがとても大きな問題なのではないかと思っています。タイトルを「美術教育展」などではなく、誰にでも理解しやすいように中学校の美術教育の時間で表した「5750分展」としたのは、「美術教育?自分には関係ないや」という人にこそ考えてほしい、その人の言葉を聞きたいという願いからでした。今後、美術や美術教育に携わる者といった枠を越えて、さまざまな人たちの対話や協働を大切に、日々研鑽し、アクションを続けていきたいと思っています。

浅見俊哉(SMF協力委員)

### 参加者の言葉

#### 渡辺範久(公務員)

今回、〈5750分展Ⅱ〉に参加して、「夢中で作品を作ると、完成した時に達成感を得ることができる」、そして「その体験が自分への大きな自信につながる」、そんな当たり前のことを考えさせられました。私は美術教育に携わる人間ではないのですが、会場に展示された小さな工夫のある作品やていねいに仕上げられた作品は、それこそ大人顔負けで、子どもたちが作品を完成させた時、どれだけ誇りしかたことかと想像しました。日本人は発言を遠慮してしまう傾向があり、それは大きな集団になるほど顕著であると思います。職業の枠を越えた議論や普段言えない小さな声を拾い集められるのは、こうした個人レベルの取り組みだからこそできることでしょう。そして、誰もが意見を気軽に交わせる場や取り組みにこそ、明日を切り開くヒントがあるという気がします。

#### 清水絢子(学生)

「5750分」という時間を聞いたとき、なんて短いだろうと感じました。この取り組みに参加し、生徒の立場に立っている先生の授業を追体験できたので、教師を目指す学生としてとても参考になりました。また「美術教育座談会」では、美術に携わる人はもちろん、それ以外の人からの意見も聞くことができ、さまざまな立場の方の意見をもとに、柔軟に美術教育について考えられる可能性を感じました。

#### 田中康裕(高等学校教諭:35年目)

〈5750分展Ⅱ〉で中学校の先生と交流し、お互いの現場の様子を共有することができました。中学校で美術教育の授業が減れば、その後の子供たちを引き受ける高校はどのように対応すればよいのでしょうか。中高一貫校を作って効果的な教育を志向しているところもあると思いますが、それよりも小・中・高の緩やかなネットワークのなかで子供たちを育てていく方が、より豊かで効果的な教育ができるのではないかと私は期待しています。まずは今回のような取り組みによって、お互いの現場を知ることが第一歩なのかもしれません。中学校の先生の真摯な取り組みに教えられることが多く、とても参考になりました。

#### 甘楽紘子(中学校教諭:5年目)

現在、美術の授業数は「5750分」。この時間でいったい何ができるのでしょうか。私たちが改めて、この「5750分」を「体験」することで美術教育と向き合おうと考えたのが、この展示会の始まりでした。「街頭インタビュー」では道行く人(老人から小・中・高生にいたるまで)に、美術教育に対しての意見や感想を尋ねました。普段、美術を意識して生活しているわ

けではない人からさまざまな話が聞けたことは、とても刺激になりました。美術教育が抱える問題のひとつは、美術教員同士の連携が図りづらいということです。美術教員は各学校に1人しかいないことが多く、小・中・高の間はおろか、同じ学校のなかでも他の教師との意見交換がしづらいという面があります。〈5750分展Ⅱ〉では、多くの人の考えに触れたことで自分の美術教育に対する認識を再構築することができ、日々の取り組みへの原動力となりました。何よりも一緒に活動してくれる仲間はとても心強く、励みになるものです。

#### 山口愛(中学校教諭:1年目)

〈5750分展Ⅱ〉に参加したのは、美術教師として勤めはじめて半年が経った時でした。参加して主に3つのことを感じました。一つめは、美術教師同士のつながりの大切さです。会場に展示した生徒の作品に対する、ベテランの先生の意見は授業の改善点の発見になりました。二つめは、制作者としての悩みと喜びでした。4日間の「公開作品制作」で、私は2日間「何を作るか」について悩みました。思うように進まない自分の制作に、学校現場の生徒の悩みや苦しみを痛感しました。3日目何とか制作はじめた自分に、来場していた女の子が「同じことをやりたい」と言ってきました。制作方法を教え、並んで制作していた瞬間、これが教育の原点であり、理想なのではないかと思いました。三つめは、美術の重要性でした。4日間で作品を完成させることはできませんでしたが、自分の作品について深く考えることができました。作品制作には締め切りはあるが、明確なゴールはない。自分がその作品を納得する形で完成させられたかどうか自分の成長につながります。学校で学ぶ教科の中でも特に美術は、評価を越えて自分の成長を実感できる教科でもあると思います。美術の重要性を、教師と制作者という両面から身をもって感じる事ができた4日間でした。

